



海老名のイチゴを

知る

出荷量県内一を生み出す 海老名自慢のイチゴ作り

市の南部にはイチゴ栽培のハウスが立ち並び「ストロベリーロード」と呼ばれる通りがあります。「イチゴの栽培は気が抜けないし、長丁場。だけれど、さらにひと手間掛けられるかどうかがイチゴの味を左右するんです」と語るのはストロベリーロードの一角で代々イチゴ栽培を営む「武井いちご園」の武井哲也さん。イチゴの収穫までを追いました。

えびな イチゴ 暦



イチゴは「苗半作」。苗づくりがうまくいけば、作物の栽培は半分成功したようなもの、という意味です。ここでは4月からの暦を紹介しますが、イチゴの苗は約1年かけて大切に育てられています。

※時期は気候や環境で変わる場合があります



◀農園内には石垣栽培で使われていた石垣の名残が



ランナーとは

イチゴのつるのこと。ランナーが成長するとその先には次々と根が生えていきます

4月～6月 苗づくり

1年前から育てていた親苗のランナーを成長させ、2番目・3番目の子苗を使う場合が多く、一つの親苗からは約30の子苗が採れます。

7月～9月 育苗

ランナーから切り離れた苗をポットに植え替えます。子苗の一つ一つに肥料や水をあげ、葉かきをして苗を育てます。

9月 定植

ハウスの中の高さ約50cmの畦の一つ一つに苗を植えます。繊細な根を傷つけないよう丁寧に植えていきます。

11月 ミツバチ放飼

開花のタイミングに合わせて、受粉に欠かせない強力な助っ人のミツバチを放ちます。



12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月
収穫・出荷	ミツバチ放飼	マルチ掛け	定植	育苗		苗づくり		

10月 マルチ掛け

定植から1ヵ月後、土の乾燥などを防ぐためにマルチ（シート）で土を覆います。苗の上にかぶせ穴をあけて苗を出します。



作物はマルチ掛けの後に苗を植えるのが一般的ですが、イチゴは逆。先にマルチを掛けるのと地温が高まりすぐに実を付けてしまうため、タイミングをみて後から掛けるんですよ。

育苗には何種類もの育苗培土にもみ殻の炭などを混ぜた土を使っています。水はけがよく、苗が元気に育ちます。

苗栽培で一番怖いのは「灰疽病」。イチゴを全滅させる病気で、治療薬もありません。苗を扱う時はハウスを無菌状態にしたりとみんなが細心の注意を払います。うちではナイアガラという機械で土に触れさせないよう空中状態で一定期間育てているんですよ。

11月～6月 収穫・出荷

開花後、約1ヵ月で実がなり収穫できます。作業は6月頃まで続きます。



イチゴの生育確認

定植が一段落すると、県農業技術センターや農協の職員が定期的にハウスを巡回し、生育状況などを確認します。この中で行う「天敵巡回」では、ハダニを退治するため、ハダニの天敵のダニを放って駆除する「天敵農法」のタイミングを確認します。



地産地消の一環で行った小学校の「イチゴ給食」の様子

完全の状態では出荷できないのが特長。とろけるような甘さと芳醇な香りが自慢の海老名イチゴ。やっぱり一番は市民の方に食べてもらいたいですね。

現在、13戸の仲間とともに出荷しています。うちのイチゴ作りのこだわりは、生育の段階で苗を一度土から取り出し葉と根を切りそろえること。面倒なんですけど、苗の生育が均一になり味も大きさも整ったイチゴができます。みんなやり方は違うけど、それぞれの栽培へのひと手間が県内一の出荷量までたどり着いたんだと思います。海老名イチゴは消費地の近くで栽培しているため、輸送日数をかけず常に

武井哲也さん

海老名市園芸協会専部会部長。武井いちご園3代目。こだわりの手法で生み出すイチゴは、過去3回農林水産大臣賞を受賞

